

幼稚園園歌ものがたり (上)

葛原しげる

〔序〕

國歌—園歌—會歌—校歌、そして、幼稚園には園歌—まごごに、園歌のない幼稚園はさびしく、情ないではないか。今の世に。工場にさへ工場歌のある今の世に。

専有慾の旺盛な幼児が、自分の歌、自分達の歌

としての自分の幼稚園々歌を有つ事は、嬉しく、有り難いではないか。否、それを有たす事は、園長先生にまつても、實に、幸福ではあるまいか。そこには、求める物と與ふる者の悦樂さへ伴つてゐるから。

かくて、私は全國の小學校に、校歌の無い小學校がなくなるのと同じく、全國の幼稚園に園歌のない幼稚園の無い様に、一日も早く、ま祈つては、頼まれては、園歌をものしてみたのが、いくつか有るやの數篇について、物語を試みたいと思ふ。

1、廣島縣 沼隈郡 鞆幼稚園々歌

本邦の國立公園の一つに、瀬戸内海が數へられてゐるのは、當然すぎる程當然であるが、その瀬戸内海を中心にして、殊に、風光明媚なるこゝに、日本第一の形勝だま讚へられてゐる「鞆の津」、「鞆みなま」、この「鞆」こそは、何處行つても、誰が見ても、飽きない名勝であり、麗はしい形勝である。否、その度毎に、その美しさが深まつて行くかと思はれるほど

である。名もめでた、玉津島たまつしま、また、津輕島つがるしま、皇后島くわうこうじま、何れは有れど、仙酔島せんすいじまの名こそはめでたさや、美しや。それらの島々を前にしてゐる鞆は、げに、世にも珍らしい良港である。而うして、その幼稚園は、不斷に波の音も聞くかまばかり、狭い鞆の町ではあるが、その幼稚園のシンボルには、海に野菊をまじりたいといふ。海に幼稚園児、野菊に幼稚園児、その結合の六かしさが、まづ作歌に苦心を要するのであつたけれども、二十年ではない、もう二十五年の久しき、只、一つ。ニコく、ピンくの一木槍でゐる私は、海にいへば波、また、船であるところから、海の波をこえる船を以て、まづピンくゝの活動をあらはさうとした。即ち、鞆の港の出船入船多くの中に、はいつて来る船の安心、やすみゆるみ、やがて、ねむりを誘ふ心持よりは、出て行く船こそは勇しくもあり、緊張してをり、そして、活動してゐるので、小さな船も、大きな船も、出船にしてみました。しかも、波をたてゝ出て行く船、また、波を乗り越えて出て行く船の二つにした。これは、對句にしても面白く、事實、鞆の港の波戸場を廻つて、仙酔へ行く―それは必ず、遊びに行くにきまつてゐる程、仙酔島は、のぎかな島であり、近い島であるので、波もない鏡の様な海面であるので、「波たてて」であるが、南、多度津、西、尾道へ、更に遠くへの船は、沖へ出て行くにつれて「波こえて」である事が多いのである。

野菊の素様なその色、また、その形もさる事ながら、その可愛さは、まことに有つてもかはらない。如何にも靜かな花である。その咲くや、足らぬところなく花瓣を開ききつて、ゆるみのないのも嬉しく、野路に咲いても、花瓶に挿されてゐても、めづべき花である。それが鞆の幼稚園のシンボルの一つにえらばれてゐるのは、鞆の縁故が、海に深いほどの結合ではないであらうけれど、幼児には、ふさはしい。そして、もし、海が、波が、波をたて波をこえゆく船が、男性的ならば、花の野菊は女性的でもあつて、幼稚園々歌に取り入れるのに、まことにふさはしいものであつた。そこで、鞆の園児にまつては、遠足の時なき近郊の野路に、この一輪を見出した時、「僕の花」「わたしの花」として、何んかに懐しく、嬉

しく取りたい花であらう。それを思つて、幼稚園の先生は、秋は末まで、しほれるまで、花瓶に、一輪つゝを、絶えさせないであるであらう。さて、その色を、空の星にたぐへ、あの、うすい色彩を、誰か繪具で染めたのかを問ふのは、過ぎた事にも思はれて、恥しい。

一、小さなお船は 仙酔へ

大きなお船は 遠方へ

静かな海に 波たてて

荒れてる海の波こえて

いさましや

いさましや

二、野菊が 野路で ニッコニコ

野菊が 花瓶で ニッコニコ

空から 星が 落ちたのか

繪具で 誰か 染めたのか

やさしいな

やさしいな

二、 東京市 品川区 瑞穂幼稚園々歌

瑞穂の國の、豊葦原の、やつ國、めでたや榮ゆく大御代に、瑞穂幼稚園の園長土川五郎先生還曆の賀を祝ふ時、私は、

その賀の祝歌にかへて、園歌を獻する事にして、さて聞けば、

稻穂をあしらつた鏡に、鳩をまらせてあるのが

本園のメダルである。そこで、鳩、稻、鏡の三つに分けてみた。

一體、幼児の歌に、三節は長すぎるけれど、これは仕方がない。三者中きの二つを選んで不足不可。その爲に、せめて、生々しく、各節に、「瑞穂幼稚園のみんなのやうに」を反復して、安心して高唱出来る様に工夫した。さて、鳩の第一節の

「仲よく きぶ鳩 あそぶ鳩 元氣が いゝな やさしいな 瑞穂幼稚園の皆のやうに」

は、たしかに、よいが、稻穂の第二節の

「日本の大事な寶です 瑞穂幼稚園の皆のやうに」

は、子寶でもあるから、まだ、よいとして、鏡の第三節は、むづかしい。

「はれます 光ります 何でも姿を うつします」

は六かしい。幼児は、園児は、曇つてゐる事はない、それこそ、いつも、ニコニコ、いつもピンピンである。いえ、時には、べそをかいたり、泣いたりしてゐます。ミは仰せたまふな。幼児のべそかきや、泣き蟲は、實は、心のまゝなるべそかきであり、あーん／＼と聲張り上げて一生懸命に、全力をあげて、泣くのであるから、大人のべそや、大人の涙ミちがつて、最も積極的である。からして、幼児園児には、晴曇はない、ミもいへるが、それは、ちこ、こちつてであらうので、やはり、幼児園児にも曇はあるとして、さて、

「何でも 姿を うつします」

こいふ精神こそは、六かしい。心の鏡を磨くこいふ事は、小學生も低學年には分りにくい。しかし、しかしながら、この文句によりて、この歌詞の反復によりて、不知不識の裡に、「何物か」を感受させては置きたいものである。そして又平素は、此の第三節だけは省いて、最も天下泰平に、

「元氣がいゝな やさしいな」

「日本の 大事な 寶です」

こ悦んでだけ居らせてよいを考へてゐる。

さて、實際は、さうしてをられますか、土川先生。

一、野山に 海に 大空に

輝やく陽を浴び

ようこんで

仲よく こぶ鳩 遊ぶ鳩

元氣がいゝな、やさしいな

瑞穂幼稚園の

みんなのやうに

二、春夏秋の雨風に

日和に のびては

花つけて

豊かな 黄金の稻の穂は
日本の 大事な寶です

瑞穂幼稚園の

みんなのやうに

三、夜晝たえず 身につけて

鏡は 磨けば 磨くほど

曇りは はれます 光ります

何でも 姿を うつします

瑞穂幼稚園の

みんなのやうに

3、愛国婦人會の江東托兒所の歌

隣保館での托兒所の歌である。行つてみるに、その室内には、小鳥の繪が多く、小鳥の玩具も目についた。善哉々々ここのモットーは、「鳩のやうに」でなくて、

「小鳥のやうに」

こいふのである。即ち

「輕快に」

こいふのである。私からいへば、『いつも、ニコ／＼いつもピン／＼』である。さういへば、小鳥は、雀でも、カナリアで

も、凡そ、幼児の友達になつてゐてくれる小鳥は、全く、幼児と同じく、少しも、靜止してはをらないのである。そこで、私としては、考へなくてはならなかつたのが、「輕快」はよいにしても、似て非なる「輕卒」の陥入であつた。輕卒に陥らないやうな輕快でなくてはならないこゝであつた。そこで、敢て、

「小さな あんよ で 枝から 枝へ」

さいひ、重ねて

「小さな はね で 大空 高く」

を強調してしまつた。足も翅も小さいけれど、「枝から枝へ」、また「大空高く」、であり、特に、

「身も 輕々こ」

たゞ、こぶばかりでなく、

「こび かぶよ」

をしたのであつた。

この心用意は、さうしても必要であつた、こいふのは、個人主義の發達しないではをれないのが、都會生活の、悲しい事實であるので、ひこり「こぶ」のでなくて、友だちも、「こびかぶ」をしたのであつた。小さな足に、力をこめて、小さな翅にも力をこめて、なのである。

第二節も、同じ心から、まつ

「小さな目ん目で、物 よく 見分け」

ました。小さな目でも、よく、物を見分けなくてはならない。恵まれない境遇の幼児が多い此の托兒所である。そこに集

る多くの幼児の將來を思ふに、男兒にも女兒にも、極めて誘惑が多い。それを判断し、識別する事が、極めて必要である。その心を、小鳥に發見して自らのを喚び起さしたのである。

次には、小さい嘴ながら、

「こゑ はり上げて」

である。よいかげんではなく、全力を上げてである。前述の、べそかきなきも全力を上げての時、その眞剣さには、うたれる。聲の限りなる小鳥の聲には、生命がある。かくて、

「よろこび あそび」

である。こゝにも、歌の心は深いものがあるのである。即ち、

「全力をあげるもの、よろこび」

であり、やがて、それが、慰安ミもなるころの、「あそび」の心でもある。

由來、讀書百遍もすれば、その中に、その意は自ら通するのである。よし、稍々難解であつても、論語讀みの論語しらすにならずに、すむのが、反復の賜である。園歌は、よし、少しは難解であらうとも、在園二ヶ年の中には、何者かを感じ受する事に、意義深いものがあるこゝを既述した。事物の判別ミか全力傾注ミか、六かしい事は、今すぐ分らないにしても、少くとも、小鳥が、

「こゑ はり上げて よろこび うたひ 歌ひ さへづる」

こいふ事は、何んな幼児にも本當である。それで、よい。それで、澤山である。それ以上は、望まないでも、よいのである。

一、小さな あんよ で

枝から 枝へ

小さな はね で

大空 高く

身も軽々みもかるくこ 小鳥はこぶこどりよ

さびかふよ

二、小さな 目め目めで

物もの よく見分け

小さな くちで

こゑ はり上げて

よろこび あそび

小鳥は歌こどりひ さへづるよ

まごころに、方今、全国的に、歌謡の洪水である。殊に、各地の花柳界の爲に新作せらるゝまごころの「新小唄」や「音頭」の類の多いことである。「甚句」さへ名を替へて、新しいものの好みの、日本人の缺點を、いよゝゝ助長させようといふチクオンキのレコード屋の商略につりこまれて、新譜レコードを買はされ、都會では、店頭で、軒下に大文字にかくれてある歌詞を仰いで、店内からのレコード演奏に聞きまされさせられてゐるのが多いのである。自ら、ポカールニコをあげて、

何さいふ情ない圖であらう。

しかし、大人は、まだ他に、それによつて救はれるところがあり、又別に、救はれる物もあるのである。しかし、凡てが凡てであるところの幼児―何事も、ひたぶるであり、眞一文字であり、全力をあげなくてはをられないところの幼児―一が一人であり、十が十であるところの幼児にまつては、ボカーンミ口は開けないでも、眼を輝かしながら、聞きこれるものが、「よいい、よいい、よいいミナー」では、困るのである。必らず、

幼児自らの歌

を、聞かして貰はなくてはならないのである。幼稚園唱歌、幼児唱歌―ほんこの童謡。名は皆よい。けれど、さて、六かしいもの、それがコドモのものを作るこゝである。

六かしい。しかし、作らなくてはならない時、作つてやらなくてはならない時、今こそ、卑俗な歌謡の洪水の渦巻の中に、引き入れられようとしてゐる幼児を、正しいコドモ自らの歌謡の安全地帯へ引き戻してやらねばならない時が、今なのである。

所謂、童謡の中に、十年、十五年昔、センチメンタルなもの、續出に對して、聲を、からし、筆を、へらして、ニコピン主義を絶叫し鼓吹した私達は、近頃は、また、あまりに、鳴物入の卑俗な童謡の多いのにあきれてゐる。

園歌の制定―甚だしき園長先生方へ、聲を大にしたいところである。(未完)